

写楽道行

フランキー堺



写樂道行



フランキー堺

写楽道行

昭和六十一年三月一日 第一刷

定価九八〇円

著 者 フランキー堺

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷 大日本印刷

製本 大日製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

写楽道行

装帧
和田
誠

蟬の季節が終ってひと呼吸いれると、東京の空は急速に澄みわたって来る。

上野の山あたりから西方を遠望すれば、くっきりと富士がシルエットを作って、夕焼の空が美しい。

あの茜色の拡がりあかねは浮世絵の夕空だ。そして、江戸の空だと鮎木栄あなぎ けいは思う。

町工場の煤煙や自動車の排気ガスが、この秋はじめての戌亥いぬいの風に吹き払われると、この辺りの街の匂いに何故か土の香が混って来る。

浅草公園の東側、東浅草の一角に正法寺がある。大都会のただ中にありながら、ここだけは嘘のように静まり返っている。

境内にたどりついた鮎木は、額をぬぐった。かなり汗ばんでいた。初秋のさわやかさのなかで、いつになく、緊張しているのが自分でもわかった。

これからこの納骨堂で、鮎木と縁の深い、ある霊を呼び出すことになっているのだ。

「やあ、やあ」

背後から声をかけられた。古い俳優仲間の大沢であった。小肥りの体は相変らずだが、シワがふえたようだ。

「お久しぶり。またやるんだって？ 懲りないんだねエ、フナさんも」

べつに大沢を誘ったわけではない。ふともらした鮎木の言葉が、どういう経路を辿ったのかは知らないが、彼の耳にまで届いたのだろう。現実派の大沢が降霊に興味を持つとは思えない。どうせ、あとで一杯やりながら、ウジャジャケようという魂胆だろう。なにせここは浅草だ。

「U・K監督が死んで、もう二十三年になるんだねエ。早い……どうりで年をとるわけだ俺達も」

（いや、ちがうんだ。今日はKさんの霊を呼ぶわけじゃないんだ）

と言おうとして、鮎木は言いそびれた。

急にK監督の思い出が溢れんばかりに湧きあがってきて、胸がつまった。

そう……すべては、Kさんとの出会いから始まったのである。

終戦間もなくの学生時代、すでに第一線のジャズマンだった鮎木は、従来の音にあきたらず、次々と新しい試みに挑戦していた。そうするうちに、ユニークな発想や容姿を買われて、彼は次第に映画界との関わりが深くなっていた。

見た目も面白いデフォルメされたパロディ音楽を演奏する大世帯の楽団を持っていた鮎木は、そのために、より複雑な仕事を消化しなければならなくなった。

ジャズ・ミュージシャンと俳優という、いわば感性と知性とに色分けされた二つの仕事を一人で抱えこんでしまうことになった鮎木は、同時に楽団の経営者であり、指揮者、編曲者でもあったのである。

鮎木は大実験をやっている科学者のような真摯さで楽団をリードし、脚本家のような思いをこめて編曲し、やりくり社長のように給料を払い、職方にまじって釘を打つ現場監督のようにドラムを叩き、吟遊詩人のようにパロディの歌を唄った。

一方、映画のスタジオでは、ややもすると監督によって、その作品を生かすための単なる一素材としか扱われかねない職分の、俳優の仕事が鮎木を待っていた。

鮎木が生来持っている自己表現の欲求と、劇的なものへの憧憬はかなり強烈だったので、

この多角的な仕事の数々に対応できていたものの、その中でも殊に「俳優」は、最も神経を消耗する大変な仕事だった。

彼は、役のヘソ（性根^{しょうこん}）を掴む工夫を重ね、掘り、その中にジツクリとたてこもうとしながら、それとは裏腹に、なんとかして脚本という枠組みの外へ飛びだしたいと希^{ねが}っていた。つまり、与えられた枠の中の自己主張が、その範囲内で生かされるかどうかは問題外で、彼はそこに決して安住できなかったのである。そこから彼の中に屈折したテンションが生まれる。この緊張した気合いが鮎木の生き甲斐だった。

全く、難儀な生き甲斐なのだが、だからといって脚本家や、現場で演出の全責任を持つ映画監督の職分を冒^{まか}してまで、我を通すわけにはいかない。

監督はそれぞれ独得の個性の持主ばかりで、アイデアを提案するのは百人百様に神経が疲れるが、概して、押しつけがましくなく、あたかも監督自身が思いついたかのように錯覚する程の巧みさで、その意識の中に潜り込むのが最良の方法だと鮎木は思っていた。

しかし、それも時によりけりで、何をどう意見具申しようとも、

「これは、私の作品です。全責任は私がとります」

と、頑として受けつけぬ監督もいた。

その中でも、鮎木が出会ったK監督は、場当りの思いつきでなく、いかにキチンとヘソ

をおさえた面白いアイデアであったとしても、押しつけがましい野暮なアピールでは全く採りあげないという意固地さがあった。

だから、Kに自分の発案を、あたかもKの発想のように彼の意識の中に滑り込ませて、ブット・インすることができたとすれば、もうどここのいかに難かしい会議であっても意のままに御することができにちがいがなかった。

たまたま、そのあたりの機微に疎く、うわだけで子分だと思いこんでいる手合いがいて、アイデア提案のあと、上目遣いでKを恨めしげに見ながら、

「こんなことは演らせてもらえないよなあ」

などと甘ったれているのを見て、鮎木は哀れを催す。案の条、

「ハイ、そんなことは絶対に演らせません」

と、Kから冗談まじりだがキツパリと拒否される結果になってしまふのである。

鮎木のKへの働きかけは、こんな具合だった。まず、Kが自分で発案したという確信を抱くようにするためには、K語（Kと同じ語り口）を使用しなければならぬ。

そして、どうしてもブット・インするのに必要な単語を幾分強調して並べる。

例えば、階段を一気に駆け下りるシーンがあるとすると、

鮎木は平凡なト書きにウンザリしているのと、このシーンで単に駆け下りるくらいなら、

いっそ省略して次のシーンの調子をあげる方が効果的だと思っているので、さほど興味はない。そこで、Kの横に立ち、並ぶようにして階段を見あげながら、こう呟くのである。

「ウーム、ここは、階段を、足、で、なく、……手摺り……腹這い。ツーツーッ」

独り言のような囁くような調子で、手摺りを腹這いで一挙に滑りおりるのはどうだろうか——とKの内側にそれとなく働きかけるのである。Kもさるもので、

「ウーム。腹、で、なくウ——お尻。仰向け。ツーツーッ」

と、やはり呟くがごとき返事がかえってくる。傍のスタッフには、二人が何を言っているのか全く判らない。Kは、腹這いでなく、手摺りを仰向きになって尻で、両股開いてツーツと滑りおりろ、と言っているのである。

つまり鮎木の提案を、もうひとつ調子エスカレートさせて、デフォルメした演技をせよという要求である。鮎木にしてみれば、階段をト書きにあるとおりダダダッ、などと誰もがやるように駆け下りさえしなければ、このト書きの枠組みを越えたわけである。そこでどうなろうと構わぬので妥協する。もはや勝負はついたと思っているからだ。

挙句、このシーンはKと鮎木のゲームの道具になってしまい、観せられる方はいい迷惑。なんとまあオーバーな演出であり、演技であることよ。なんぞ深淵な意味が隠されているのか知らん、と考えるんだり、あきれたり、どうしても判らないと、しまいには腹が立ってく

る……と、こうなる。

しかし、この、おかしなゲームが、絶妙のバランスによって統一されたのが「幕末太陽伝」という作品だった。

——こんなことがあった。

品川の宿場女郎屋土蔵相模で、代金が払えないのも承知の上で豪遊し、居残りをした佐平次という主人公が、胸の病に効くという煎じ薬を、徳利から平べったい土器の皿に移しかえながら、立板に水を流すように長ゼリフを言い、そのあいだに傍に坐った女郎からチョン鬚のカツラも素っ飛ぶほど思いつ切り頭を小突かれ、ひっくり返るかとみえて、ひっくり返らず、煎じ薬は一滴もこぼさず、また続けて平然とゼリフを喋りまくるというシーンがあった。ここで、Kは佐平次役の鮎木に例の呟きで新たな要求を發した。煎じ薬を徳利から皿に移すのは、鮎木の提案だったが、それを、

「逆に——平らな皿、から、……とっくりへ。煎じ薬……」

と、こういうのである。平べったい土器皿から徳利の狭い口へと移し入れよ……というのだ。皿は丸くて、どこにもつぎ口はなかった。

「ウーム。なぜ……？」

と鮎木。

「エー。詮索の外……」(どういふ理由かは詮索するな……)

「ウーム。セリフ、が、長い、早口、……集中、困難——頭、小突かれる——薬、こぼさない……精一杯——ウーム、人間業じゃ、ない」

と鮎木。

「人間業で、なく、誰にも、できぬことを、ワンカットで——やりましよう！」

Kは、やりましよう！——だけ大声を張りあげた。

人間業でなく、か。よし——誰が負けてたまるか。鮎木は自らと壮絶な戦いをはじめた。まさに死闘であつた、が、その日の裡には出来なかつた。

家へ帰り鮎木は目を血走らせて生理の限界に挑んだ。翌日、この至難のカットをととうとうやり遂げたのである。彼は、いまだにそのときを夢に見る。あれは、たしかに人間業の及ぶところではなかつた。

Kには進行性筋萎縮症という肉体的なハンディキャップがあつた。Kが必要以上の離れ業を鮎木に要求したのは、頑健で、バイタリティに溢れる彼に仮託する何かがあつたに違いない。鮎木は、それを充分承知の上で、Kの一見無謀とも思える誇張された要求を真正面から受け止め、それをバネにして、そのデフォルメの底にあるKの真実の叫び声を汲みとろうとしていた。

鮎木はその作品で主演賞をとった。そして、それを契機として、音楽と笑いとが共存できるか、という彼の壮大な実験楽団は解散した。しかし鮎木はジャズを、ドラムを、捨て去ったわけではなかった。

「音楽で感性に磨きをかけ、俳優としての技と思想の形成に役立てるのです。片翼では鮎木ジェット機は飛べませんからな」

鮎木は、いつもKにこう話していた。

Kは、

「さいですか。まあ、おやんなはれ」

などと言って肩で笑殺するのが常だった。

とにかく、奇妙な師弟の絆きずなによって二人は結ばれていたのである。

「なんだ、お前さんたちも来てたのかい」

大沢の声で、鮎木は我にかえった。納骨堂の入口の陽当りのよさそうな場所を選んで、佐藤と小西が坐っていた。まん丸な佐藤と、ひよろ長い小西が並ぶと、月賦販売デパートの宣伝のようであった。

大沢も彼らと顔を合わせるのがしばらくぶりらしく、誰彼の消息を確かめている。みな一様に頭が白くなった、と鮎木は歳月の流れを感じる。

二人とも鮎木とは長い。佐藤は今、放送局の重役になっており、小西は、テレビでフケ役専門の俳優である。

「フナさん、なんだか顔色がよくないね」

小西がいった。昔は映画でよく共演した仲である。

納骨堂に上がると、

「ねえ、今日はその、霊の会だけでお終いかい。例の会の方はやらないの」

佐藤がいった。

「そりゃあ、この顔ぶれだもの、おあとのお楽しみだ。ところで、これから何をやらかそうてんだ」

「実はね……」

鮎木がちょっと言い淀^{よど}んでいると、大沢が横から口を挟^{はさ}んだ。

「義理固いじゃないですか、フナさんは。U・K監督が亡くなってもう二十三日忌だったんだよ、この六月で。Kさんの供養をかねて、今日はここで……」

「Kさんねエ」

佐藤がなつかしさの中に、ちよっぴり恨みがましい響きをこめて嘆息した。

「扱いにくい人だったねえ」

「そうそう、酒を飲ませたら駄目。俺はトコトン絡^{かち}まれて参ったことがある。あの人はね……」

小西が身をのり出して、一同はKの思い出話にふけり始めたが、鮎木は一人、別の想念を追い続けた。

あれは昭和三十六年夏のことであつた。

大映の第三ステージに建てられた街角のセット。カメラが据えられ、ライティングを仕込んでゐる表側の華やかな喧燥けんそうにくらべると、セット裏は、大道具の支え棒や、ライトのコード、脚立などで足の踏み場もない乱雑さだ。

その片隅で、K監督は、共に表側の準備が出来上るのを待っていた主演俳優の鮎木栄に語りかけた。

驕おごくようなおだやかな声だった。

「フナさん。次の作品はね……写楽です」

「写楽というと……ああ、これですか」

鮎木は、フツと閃ひらめいた写楽の似顔にようえ絵の中で、最も印象的な部分を咄嗟とつさにビック・アップしてKに示した。

鮎木は、彼がKに対する時にだけ示す、どこか調子づいたジェスチュアで、口を大きくへのに曲げ、目を八方睨にらみにして、両の掌をバツと拡げてみせた。

「写楽。いいですねえ。こうすると私の顔はあの似顔にようえ絵によく似てるといわれるんですよ。たしか、赤坂あたりのお茶漬屋の壁に張ってあつたなあ、写楽の顔」

Kは、ひとしきり肩で笑って、急に真顔に戻った。